

# ほな、い歴史通信

第37号  
2005.12.1

## 秋の八溝山に登る

— 大子の自然と歴史を体感 —

十月のある休日、八溝山の散策を楽しんだ。周知のように、標高一〇二メートルの八溝山は茨城県内でもっとも高く、古くから山岳信仰の山、霊峰として名高いばかりでなく、様々な歴史上の逸話を秘めた山でもある。本誌編集人の小澤園彦さん、鈴木徹さんの案内のもと、私と私の友人らを含めた総勢六名はかすかに色づき始めた八溝山を目指した。

天気予報は芳しくない。昼頃から雨が降りそうな気配の中、日輪寺入口の駐車場に車を止め、山頂までの道のり一・七キロを歩き始めた。歩きながら、小澤さんの解説が入る。水戸藩主徳川光圀は天子巡村の折に八溝山をしばしば訪れたこと、七世紀から九世紀にかけて大陸文化を学ぶために派遣された遣唐使の資金になったといわれるほどに八溝山は産金の山でもあったこと、また光圀自ら命名したといわれる「五水」は昭和六十年三月に「八溝川湧水群」として環境庁「日本の名水百選」に選ばれたこと、等々。深い広葉樹林の中を、そこに刻まれた歴史に耳を傾け、想像をめぐらせながら散策するのは楽しい。

「五水」の一つ、「金性水」で休憩。光圀がとくに好んだとい

われる水で、「五水」のなかではもっとも湧水量が多く、ポリタンクに入れて持ち帰る人も多いという。「一丁はおよそ百メートルですよ」と教えられながら急な八丁坂をのぼり、やがて山頂に到着。八溝嶺神社にお参りし、展望台に上る。残念ながら眺望はきかなかつたが、条件が揃えば年に何回かは富士山が見えるという。地元の俳人、菊池香清の句碑「神さびて八溝山頂大夕焼」のところでは、「ここから見る夕焼けは、それはそれは見事だ」と小澤さんの弁。山頂は、ちょうど福島県棚倉町との境界線上にある。予報に反して晴れ間が見えてきた空のもと、そこにシートを広げての昼食は、また格別の味わいであった。

さて、余暇の楽しみ方が多様化している現在、「地域が主体となつて自然、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによつて、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動」として「観光まちづくり」が注目されているが、その一つに、「自然ガイドツアー」がある。インタプリター（案内人）の案内で地域の自然、歴史、暮らしの知恵を単に見るだけでなく、体感するという新しい試みである。これを特徴づけるキーワードは、「体験する」「興味を引き出す、感じる」「楽しむ」である（新たな観光まちづくりの挑戦）。

今回の八溝山散策は、まさにこの形であった。地元の小澤さん、鈴木さんの案内でガイドマップにはない体験をし、興味を引き出され、楽しませてもらった。これが実感である。最近県内でも「笠間ふるさと案内人」（笠間市）、「まちかど案内人」（常陸太田市）といった観光ボランティアが活躍している。何度も訪れてくれる、いわゆるリピーターを少しでも増やすために、大子町にも「自然ガイドツアー」の仕組みづくりが求められているのではあるまいか。そのための資源は十分そろっているのだから。

（齋藤典生）

戦争を仕よのびた高徳寺の林凡鐘

飯村尋道

上郷にある高德寺は、鳳林山阿弥陀院と号し室町末期（佐竹時代）に創建された曹洞宗の古刹で、町指定文化財である木造茅葺き四本櫓丸柱の山門を始め、欄間に高砂が彫られた総門など歴史的風格のある寺である。

同寺には、天明二年（一七八二）に地元信徒の寄進による梵鐘が残っている。水戸領内で古い梵鐘があるのは実に稀である。戦時中の金属類回収令（昭和十七年）や、幕末の水戸藩九代藩主烈公（徳川斉昭）の海防策により、領内各寺院の古鐘や名鐘が、『毀鐘鑄砲』の犠牲となって消えている。実はこの高德寺の梵鐘も、金属類回収令により強制供出を命じられたが、心ある人達の機転により、命永らえ今日に至っているのである。

この梵鐘（半鐘）について、先代の奥さんの齊藤小子さんによると、「戦時中、弾にするからと没収された。あっちこっちのお寺から鐘が集められ、『まとめて員数が合えばよい』とのことから、特にこの鐘の音がとてもいいので供出するの忍びなく、員数合わせに上町の火の見櫓の半鐘を外して供出し、この高德寺の半鐘をその代わりに火の見櫓に吊した。その後、地元で亡くれた人が何人かいて、『気持ち悪い』からと高德寺に戻したと聞いている。」と云う。

そして、「このことを知っている古い人は少なくなつたが、上町の飯村谷衛門さんなら火の見櫓の前に住んでいるので、あるいは分かるかも知れない。」と云うので、早速、上町の飯村さんを訪ねてみた。

飯村谷衛門さん（八十三歳）によると、「その話は聞いて知っている。誰が高徳寺の釣り鐘をここに吊し、火の見る半鐘を出したのかは分からないが、心ある人がやっつたんだろう。火の見櫓は（今はないが）消防小屋の左つかのツマにあった。杉の木三本で作った火の見櫓で、半鐘がぶらさがっていた。高德寺に釣り鐘を返した後は、シモの駐在所にあったサイレンを持ってきた。」と云う。

梵鐘は、径三〇センチ高さ五〇センチ弱の「半鐘」で、本堂西側の回廊の上に吊り下がっている。齊藤住職によれば「殿鐘」と云うそうだ。この梵鐘には、以下の鐘銘が刻まれている。

『上郷村施主、

松浦治左衛門、

松浦治右衛門、

同性 善藏、

同性 徳次郎、

同性 與重、

同性 久衛門、

同性 兵吉、

増子勘左衛門、

佐藤彦右衛門、

同 善太郎、

同 長十、

同 嘉十、

女人念佛講中

馬場、道測、白坂、大貝、坪

貝那沢、上塙、峯岸、下塙

同性 齊藤市エ衛門、

同 作左エ門、

増子 兵十、

施主、鴨志多政平、

益子利助、

町附村施主、

飯村徳左衛門、

同性 与左衛門、

増子長左衛門、

同性 治兵衛、

相山偽作、

天明二壬寅歳三月吉祥日

願主、金藏、

常州久慈郡鳳林山高徳寺

仕寶現住大洲代

以上の通りである。天明年間と云えば、天明の大飢饉や浅間山の噴火などで、特に東北地方は目を覆う惨状だったと云う。当地方も冷害による凶作で農民の窮乏は察して余りある。そのような状況下のなかで、郷土の先人達は浄財を募り梵鐘を寄進したのである。この梵鐘（半鐘）は「音がとてもいい」（齊藤小子さん）と云う。郷土の先人達の真心が響いて来るからだろう。本堂で、住職の奥さんの手作りのお饅頭を頬張りお茶をよばれながら、山緒ある山門、銀杏や榎の太木、そしてここを菩提寺とした荒時氏の鎗城址に目を遣る。天明二年（一七八二）、そのままの風景をそこに見て寺を出た。

# 光圀公の「巡村先の食卓」

T Vドラマ「水戸黄門」の中にも出てくるが、光圀公は食べることに関しては、食通で知られていた。光圀公は巡村先でどんなものを召し上がったのだろうか。

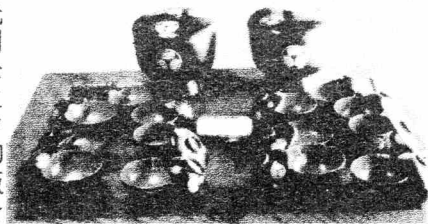
光圀公は、寛文元年（一六六一）父頼房の死去により、三十四歳で藩主になった。光圀公は寛文三年を皮切りに藩主時代に六度、元禄三年（一六九〇）西山に隠居してからも五度、計十一度保内（大子）地方を訪れている。

水戸藩は御三家であったから、参勤交代はなかったが、藩主が国もとへ帰るときは「就藩」といって幕府の許可が必要であった。水戸藩は新しい藩であり、光圀公の藩主時代は、藩政の強化と安定がもたらされる時代であったから、光圀公は就藩する度に領内をくまなく巡村し、直接見聞することによって民情や民政をとらえる必要があった。

光圀公の保内地方への入り方には二通りあった。一つは小里（旧里美村）や下高倉（旧水府村）からの峠越えの経路、もう一つは武茂郷（馬頭町）から入る経路があった。

光圀公が保内地方を巡村した時期は、六月から十月にかけてであり、その時は町付の慈雲寺や飯村武助（宗興）宅を常宿にしていた。保内地方の宿泊先や休憩先での食卓について、どんなものを召し上がったのかについてはまとまった資料が残されていない。光圀公が巡村先で宿泊をするときは、付き添って来た賄い人が調理をしていたが、親交が深まるにつれて、宿泊先のものが調理した手料理を召し上がっている。

町付の飯村家では光圀公が九月頃訪れたときは、夕食のお膳に鮎をはじめ、キノコ（しめじ）、柿、あんず等の土地の産物を添えるなど心づくしをしている。鮎は光圀の好物の一つであった。一皿に塩焼と醤油味の色つき焼を盛りつけ、味と見た目の違いを楽しみながら召し上がったといわれている。



光圀公の御膳、お櫃、お椀

時、光圀公に夕御飯を献上した旨が大金家に伝わる『旧記』に記されている。

現在、飯村家には光圀公拝領の茶碗、葵の御紋入りのお櫃、お椀、光圀公側近の文書などが大切に保存されている。

元禄五年（一六九二）六月二十三日光圀公は、西山荘に隠居後初めて馬頭地方を巡村した。二十四日地藏院（後に馬頭院）や大法院（後に隆真院）に立ち寄り、二十五日は重貞の案内で光圀が建立を命じ完成した那須の国造の碑を参詣した。その夜は梅平の小右衛門（重貞の息子）宅に宿泊した。その

- 御 鱈たまごのし 大根おろし 御 汁ねいも白みそ
- 御 煮物 かつうふし 御 飯
- しそ葉で包 御 焼物 鮎の焼びたし
- かんひやうで結う

御膳塗木具御茶碗にて

（注：『光圀御成敗顛末旧記』『水戸紀年』では朝御飯、『九左衛門旧記』では、夕御飯と記されているので断定することはできない。）

また『水戸紀年』によると、「公殊二塩梅等ヲ賞セラレ猶其ノ献立ヲ所望シ玉ヘリ」とあり、光圀公は塩梅を賞味されている。

光圀公が訪れた六月二十五日頃は、現在の暦にすると七月下旬にあたり、なす、しそ、根いも、鮎などの旬の食材の味が生かされた時期である。献立は質素なものであるが、光圀公はたいへん気に入る、後で書き出させている。

（小澤）

## 全国図書館茨城大会に参加して

茨城県では、平成十七年から毎年笠松運動公園等を会場に、各種の全国大会が開催されます。

平成十七年は全国図書館茨城大会、平成十八年は全国生涯学習フェスティバル、平成十九年には、全国健康福祉まつりいばらき大会、そして平成二十年には国民文化祭いばらき二〇〇八が開催されます。

今年行われた全国図書館茨城大会は、十月二十六日から二十八日までの三日間、県民文化センターを主会場に、全国から図書及び図書館関係者約七〇〇名が参集して盛大に開催されました。

大会では、メインテーマ「常陸国から図書館の未来を探る」サブテーマ「読書の力、図書館の力が社会を変えろ」を基に、全体会、十二の各分科会が開かれ、その中の一つ「公立図書館―進め図書館―変化への可能性を拓く」の分科会では、現在、図書館を巡る厳しい状況の中「官から民へ」と指定管理者制度の導入の検討、一部業務の委託や、市町村合併による未設置自治体の「解消」という珍現象と、既設図書館の再編統合問題等、公立図書館を取り巻く今日の状況の、厳しい現実が報告されました。

こうした状況にあっても、図書館に寄せる住民の期待はむしろ大きくなっています。各図書館においても利用者の増加、特に成人の伸びがみられ、また、子育て支援、学校教育支援等の新しいサービスに対する要望が高まっております。

財政的に厳しい状況にありまして、地域や住民の図書館への期待にどう応えることが出来るか容易ではないと思います。各参加者からもそれぞれの立場での真剣な議論が展開されました。

大子町においても、茨城県モデル図書館事業の支援を受け、従来の中央公民館内の図書室を廃止して、今年四月に旧水郡医師会看護学院を改修、図書館「プチ・ソフィア」をスタートさせて八ヶ月が経過しました。当初は大変心配をしましたが、入場者、貸出冊数とも順調に伸びています。

しかし、一方においては「図書館を利用しない人、図書館の必要性を感じない人」の町民が多くなることも事実であります。こうした人にも図書館の役割を認識してもらうために、読み聞かせ会、学校への団体貸出、各種の行事への出張図書館等実施し「図書館はこんなこともやっているのか。図書館は役に立っているんだな」と情報提供機関として認識されるよう努力したいと思っております。

それぞれ忙しい中ではありますが、また来館されていない方がありましたら、是非一度来てください。そして本を読むことで豊かな知識との出会いがあるかもしれません。職員一同あなたの来館をお待ちしています。

(鈴木 徹)

### 編集人

斎藤 典生 (茨城大学人文学部)

野内 正美 (茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫 (元 教員)

小澤 園彦 (元 教員)

吉成 英文 (大子町立給食センター)

鈴木 徹 (大子町生涯学習課)

### 編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡大子町大字池田二六九九番地

〒319-3551 ☎02957(2) 2627